

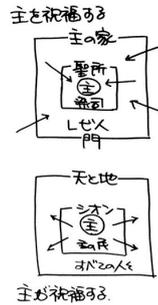


都上りの詩篇 詩篇134篇

詩134.

2013.2.7

民が祭司に「1 主を祝福せよ
すべとのましむべら
夜、主の家ど立つ香たす。
2. 両手を上げよ、聖所に向もて
て主を祝福せよ。」
祭司が民に「3. 主が祝福するやうに、シオンから。
天地を造らぬ方。」



- 創12:1-3 天地を造らぬ方が7日に祝福した。
1:22,28 「主よ、さあ」と祝福した。
- 創12:2-3 アブラハムを祝福する。
(祭司の民が主を祝福すると全世界を祝福する)
- 民6:23-27 幕屋が建てられた時の大祭司の祝福(詩67)
- 出32: 金の3牛の時にレビ人 → 申10:8 主に仕えるレビ人
- 1歴9: 主の家の門衛。1歴15:,23: レビ人
- 2歴31:2 セセヤ。「感謝し賛美せよ」と叫ぶ。
- ネハミヤ7:8:9:
- 使16:25 真夜中に1夜とシラスが賛美すると門が閉じた。
- 1テモ7:28 男は手を上げて祈る。
- Rev.7:9-17 聖所を登る徒も主に仕える

- 主をほめたえよ。= 主を祝福せよ。/ 主が祝福する。
- 主の家 → 聖所 / シオン → 天地。
- Ps121,124 天地を造らぬ主。
- 夜? Ps127. 町を守り者。門, Ps130 夜の門衛(朝を守り者)
- Ps133,134 (見よ・ヒネー)をほむる。

詩篇134篇、都上りの詩篇の最後の詩篇です。最後にふさわしいですね。

1節から2節と、3節。2つに大きく分けられます。1節から2節の方は、イスラエルの民が、祭司レビ人に、「主を祝福してください」というふうに頼むわけですね。それに対して、祭司、大祭司が、3節の方で答える。「シオンから祝福があるように」という大祭司、祭司の祝福が3節。1,2節と3節が礼拝の応答のようになっています。都に上ってくる目的が、この大きく2つの応答でまとめられているということが言えると思います。

「主を祝福せよ」という方ですけれど、このほめたたえるのは、祝福するという同じ言葉ですね。主を祝福する方は、主のしもべたちが、主の家で祝福するということと、聖所に向かって祝福するという2つに分けられると思います。主の家で、神殿で、聖所でと、その場所が特定されているということです。「夜ごとに」というところは、127篇、130篇あたりにありますけれど、町を守る者、門で朝を待ってその鍵を持つてる人。朝まで門衛している人達。その昼も夜も仕えているレビ人のことを特に言われているものだと思います。「聖所に向かって手をあげる」これは、いけにえを捧げる祭司のことを言っているのだと思いますので、主の家、そして聖所というように、広いところから、もっと狭いところというものが、その順番です。

もう一方の、祝福の方は、シオンから祝福される、天地を造られた方ということですので、シオンに祝福が神様から来る。主の民に来る。それは、天地、全世界の祝福のためであるという順番で、中から外、というのが、その1節から2節と3節の対比の所に書かれているところだと思います。

「天地を造られた主」という言い方は、都上りでは、121篇の守るという詩篇と、124篇の中に書かれていますね。隣の133篇も134篇も出だしが、「見よ・ヒネー・なんと」

という言葉で始まる詩篇になっています。天地を造られた主が祝福するというのは、創造の初めから祝福されているとこですね。創世記2章の1節から3節で、天地を造られた主が、7日目に祝福しました。1章22節と28節のところの、動物達に言うことと、人間に言うこと。そこで「産めよ増えよ」と言って祝福して命じられたという言葉になっています。最初から祝福が目的だったということですね。

創世記12章、アブラハムに約束の地へ行きなさいというところですけど、ここで、「私を祝福する者をわたしは祝福します。あなたは大きいなる国民になります」ということですけど、これは祭司の民についての約束ですね。神様の民が、神様を祝福する主に、賛美を捧げると、全世界がそれによって祝福されるという祭司の民の約束をしている。アブラハムに与えた約束のところが、創世記12章。そして、その約束が何階層にもなって成就すると思いますけれど、アブラハムの約束が、モーセの時代に成就しているところがありますね。

その中で、幕屋がもう一度造られて、大祭司がその幕屋が建て終わった時に祝福する。その祝福が、民数記6章、詩篇の67篇にもあるように、「民が祝福されて、聖所が祝福されるならば、全世界が祝福される」ということが言われています。

特に、「主のしもべと、主に仕える者、聖所で、主の家で、」ということであれば、出エジプト記32章の金の子牛の時に、レビ人が神様の側で戦ったという、その主に仕えるレビ人、主の宮の門衛であるということは、第1歴代誌の中に何度も書かれていますね。門衛だったり、主の宮で、昼も夜も歌ったりということも、その責任になってます。昔は、幕屋の時は移動する責務がありました。天幕を移動するのがレビ人だったけれど、神殿が建てられた時には、その働きが終わって、今度は守ること、歌うことが、レビ人に与えられている。

第2歴代誌の31章で、何度も戦う中で、もう一度ヒゼキヤが神殿で神様に戻るというようなことが何度もありますけど、そのヒゼキヤが命令するところで、「主の宮で感謝し賛美せよと、感謝と賛美は私たちのつとめです」ということですね。ネヘミヤの7、8、9章あたりのところには、連れられて行ったバビロンから戻ってくる。その戻ってきた時に、もう一度、その礼拝の制度が整えられるところがあります。興味深いところでは、使徒の16章25節のところに、パウロとシラスが捕らえられているのですが、真夜中でも賛美してるんですね。賛美をしていると、門が開いて救われるというストーリーがありました。第1テモテの2章のところには、「男はこうしなさい〜」という中に、「手を上げて祈れ、きよい手を上げて祈りなさい」ということは命令されているところです。聖書の最後の黙示録の中で、特に7章9節から17節のところでは、「昼も夜も主に仕えている、その主のしもべたちが、聖所で昼も夜も主に仕えている」というところが書かれています。黙示録全体が、この「ハレルヤ、主を賛美せよ。主が祝福してください」ということの結論の部分ですので、都に上る目的、都が与えられる新しい都の祝福の記述として、黙示録は、この134篇の成就であるということも言えると思います。